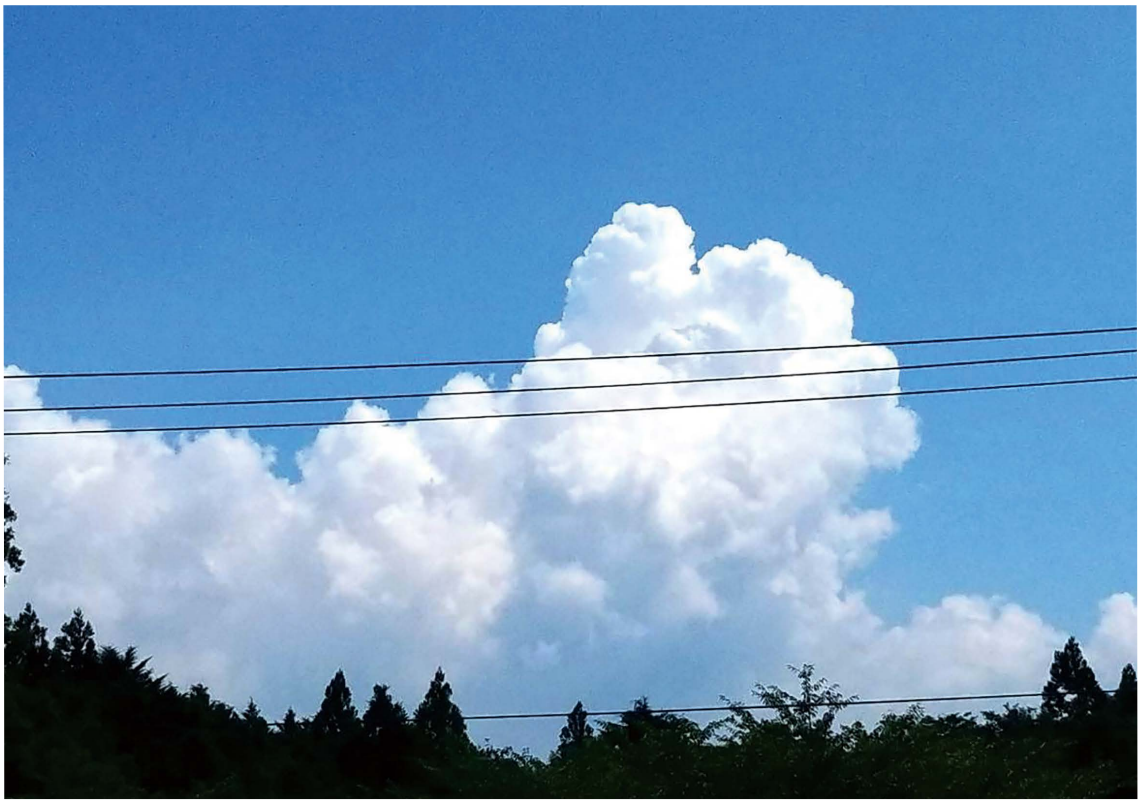
富士山麓病院介護医療院新聞
富士山麓クリニック
第168号



施設の玄関から見える晴天と入道雲　（撮影：CAC 長田）

《症例検討・115》

突然の暴力

院長　清水　允熙

今回は、八十五歳の男性Nさんの例です。

症状

Nさんは物忘れの進行に伴って、部屋の中で大小便をするようになりました。注意すると怒り出し、妻に乱暴する傾向も強くなりました。

昼間はなんとかトイレに誘導することができますが、夜間はそれが不可能のため、入院となりました。

生活歴

Nさん一家は、妻と息子夫婦と孫二人の六人暮らしです。Nさんと息子は有名な大学の出身です。親子ともに超一流企業に勤め、Nさんは重役にもなった人です。妻は七十五歳でまだまだ元気です。年齢よりはずっと若く見えます。

Nさんの物忘れがいつ頃強まり、どのように認知症を進行させたのかは、家族の説明からは定かではありません。いずれにしても忘れっぽくなり、トイレの場所を間違えるたびに家族は驚き、困惑したのです。

メモ

トイレを探してもどこにもみつけることができないときのNさんはさぞ困ったことでしょう。過去の輝くばかりの経歴は、何回かの粗相でもろくも崩れ去り、最近では家庭内における発言権も失われつつある状況が脳裏をかすめるからです。

家族の悲鳴にも似た注意、嘲笑にも等しい忠告は鋭いムチの音のようにNさんの心に響き続けています。ただでさえ家族の団らんから遠ざかり、より孤独感を強めつつあったNさんにとって、大小便の失禁は家族とNさんを隔てるための有刺鉄線を、自ら張りめぐらす行為以外の何ものでもなかったのです。

したがって、便意を催してトイレを探し見つけることができないときの困惑はどうにもならない極限状態に達してしまうのが常でした。

概して認知症の症状を呈する老人が何らかの理由で窮地に追いつめられた場合、その状況を打開するかのように自分に都合のいいような判断（幻覚・妄想）が出現します。

必死にトイレを探すNさんには、そこがトイレであったり、もしくは排便をしてもいい場所のように見えてくるのです。

したがって、何のためらいもなくそこで用を足してしまいます。

問題はその後です。やがて部屋の机の横に排便してあることを家族が発見します。家族は嘆き悲しみ、二度とこんなことをしないでとNさんに懇願します。しかし彼にとってそれは心外なことです。自分に対する言いがかりであり、侮辱としか受け取れません。

なぜなら自分はいつも当然の場所で当然のことをしているだけだったと思うからです。

したがって、家族にただされれば「私はそんなことはせん」というのが当然です。昨日だってちゃんとトイレへ行ったとしか思い出せないからです。そしてさらに追及されれば「ばかにするな」と叫んで興奮状態に陥ります。

興奮後の嫌な気分が解消されなければ、その日のうちにまた次の日にでもNさんは突然イライラしはじめます。そして急に怒り出して乱暴行為に及んだりします。被害者はたいがい妻です。周囲の人たちには、Nさんの突然の興奮の理由がわかりません。

ところで、Nさんの怒りを買った行為がもうひとつありました。それは「失禁にはオムツをさせたらいい」という意見を聞いて、家族がそれを実行したことです。当然Nさんは怒り出します。乱暴行為に至ります。

この行為によく似たものに、お年寄りに入浴のとき裸になってもらう場合があります。羞恥心などわからないほどに認知症が進行してしまっていると思われるお年寄りが、突然拒否したり反抗したりすることがあります。

それはお年寄りが、尊厳を傷つけられ侮辱されたと考える力が一瞬回復したときです。また、周囲の人たちから不愉快に扱われた経験を思い出し、その場の状況に重ね合わせて怒り出すときです。もちろん暴力で拒否の意を表すのは男性の場合が多いでしょう。

認知症の老人が理由を言って

入浴を拒否する場合には、それでも何とか同意を得て入浴させることができます。

認知症がさらに進行している場合にはどうにもならないことが多くなります。老人は何をされるのかわからなくなっていて、不安と恐怖心から拒否するからです。それでいて入浴後にはさっぱりとした顔で「ありがとう」と礼を言うことができたりします。

時には、認知症の老人は周囲の状況に全く関係のない出来事を思い出していることがあります。そして、その出来事による怒りを爆発させることがあります。その場に居合わせた人は、なぜその老人が怒り出したのか見当がつきません。うろたえるだけとなりかねません。

その老人が不機嫌になったり、興奮したりする原因となる出来事を調べ、その原因と老人との関係の改善から私たちは問題の解決をはからなければならないでしょう。

CAC チーム及びケースワーカーへ認知症についての講義を行う清水院長

新聞を読んで

新聞一六七号を読んでくださった読者様からのご感想を紹介します。

・院長先生の症例検討を読ませていただいて、父を認知症に追い込んだ責任は私たち子供にもあったのだと今になって気付き、亡き父に詫びています。

・勝亦さんの看取りの文章を読んで感動したという人が「富士山麓病院には認知症にならないと入れないんかねえ」と言っていました。

・内藤編集長の「ふじは日本一の山」を楽しく読ませていただきました。浅間の語源についての深い解説はとても勉強になりました。

感想・原稿募集

左記のとおり、原稿や感想を募集いたします。ご家族の日ごろの悩みや利用者様への想い、本誌を読んだ感想など、ご自由にお寄せください。

《内　容》

・原稿（四〇〇～八〇〇字程度）

・コラム（写真やイラストがあるとなお可）

・感想文やコメントなど

《締　切》

・令和四年十一月三十日（一六九号掲載分）

〆切に関係なく随時受付しております。

《送り先》
〒 412-0006
静岡県御殿場市中畑 1932
富士山麓病院介護医療院
新聞編集担当まで
Fax：0550－89－8017
Mail：k-team@ninchisyo.jp

【ご家族からのお便り】

熱意と感謝

雁部 克彦

熱意ある富士山麓病院介護医療院のスタッフの皆様に感謝をしたいと思いペンを執りました。

私の兄は今年十月で七十三歳になります。その兄がつい三年前のこと、脳に異常が見られ自分自身の行動がうまく取れず徘徊をしたり、家では意味もなく大声を出すようになりました。

私は兄と二人で暮らしており（当時、私は六十六歳）まさかこの歳で兄の介護をするなんて思ってもみませんでした。介護とは別の社会の出来事だと思っていたのです。私は悩みました。元気だった兄の姿はもうそこにはなく、痩せて変わり果てていました。しかし、いつまでも悩んでいてもしょうがないと思い、いろいろな施設や病院等を尋ね歩きましたが、一向に回復する様子がありません。それどころか、ベッドで寝たきりになり、痩せていく一方でその姿は廃人のようでした。食事もできず、以前のように会話をすることもできなくなってしまいました。そのときは本当に辛い日々でした。

そんな苦しみのなか、富士山麓病院介護医療院を知り、お世話になることにしました。しかし、担当医の先生からのお話は思いがけないものでした。このまま点滴の生活ですと寿命は約三ヵ月程度ですと言われたのです。

私は目の前が真っ暗になり、どうしたら良いものかわかりませんでした。その日から二～三ヵ月が過ぎたころ、私は兄がもう数日として生きてゆくことができないだろうと覚悟を決めつつありました。でも、私は兄にいろいろ世話になっているので、一日でも長生きをしてもらいたいという願いでいっぱいでした。

そんななか、同じ気持ちでいるのは私だけではありませんでした。それは、病院内のスタッフさん全員でした。明るく患者さん一人一人に対して熱意を持ってお仕事に従事される姿を見たからです。

それからまた何ヵ月か過ぎたころ、看護師さんから朗報が入りました。兄が軽い食事をするようになり、点滴をしなくても良い状態になったと伝えてくれたのです。それに、看護師さんの手を借りてベッドから降り、車椅子に乗ることができるようになったとの報告があったのです。

この朗報は私にとって奇跡が起きたとしか思いようがないものでした。しかし、この出来事は決して奇跡ではなく、スタッフの皆様が患者さん一人一人に楽しく長生きしてもらいたいという熱意があるからだと思いました。

富士山麓病院介護医療院に入所してから担当医やスタッフの皆様と出会えたことは、本当に良かったです。約一年と十ヵ月の間、世界中では新型コロナウィルスの蔓延による危機的状況のなか、熱意ある介護、看護をしていただき感謝でいっぱいです。

兄は介護度五でそれ以上回復することは今の医学では難しいとのことですが、スタッフの皆様のご尽力により、食事ができ、車椅子にも乗ることができ、会話も少しではありますができるようになりました。

兄は現在、特別養護老人ホームで元気に過ごしております。

富士山麓病院介護医療院で病を良くしていただいたことは、生涯忘れることができません。スタッフの皆様には本当に感謝の気持ちでいっぱいです。

どうぞ、お身体に気をつけて、お仕事に励んでくださいますよう、心より願っております。本当にありがとうございました。

Sさんの歌

介護職員　松橋　孝尚

「これ、私のこと!?」と、Sさんの奥様は喜んでくれました。私が十年以上前、本紙の前身である御殿場高原病院新聞に掲載させて頂いた五行歌という短詩を読んでくださったときのことです。

去年「もう年は……
越せないかも？」と思った
と、仰る奥さんの
愛情が支えてるのだと思う
御主人の穏やかさ

御殿場高原新聞
2009年10月号より

これがその時の五行歌。まさにSさんとSさんの奥様のことを書かせて頂いた歌でした。

Sさんがお亡くなりになられ、もうどのくらいの年月が経つでしょう。

ある職員が、Sさんのことを「本当に凄く家庭を大事にして来た人なのだね！だって奥さん、あんなにSさんを大事にしてるんだもの」と話していたことも昨日のように思い出せます。

その言葉には私も全く同感で、Sさんが現役で仕事にご活躍されていた頃を私は存じ上げないのですが、きっと素敵な優しいお方だったに違いない、と今も思うのです。

◎

当時、私は自費出版で歌集を出しました。それは今、自分で読み返しても恥ずかしくなるような、生意気で稚拙なものですが、にもかかわらずSさんの奥様からは丁寧な感想のお手紙も戴きました。

今も大事に保管している私の宝物のお手紙。奥様の優しさに感謝の思いです。

私事で恐縮ですが、今年の夏で勤続二三年となりました。

普通、大ベテランでなければおかしい自分が、今でも日々反省の連続で周囲に支えられ、助けられ、今日まで勤務できた次第です。

コロナ禍以前のような面会がなかなか厳しい現状ですが、大事な利用者様へのご家族の思いに当然変わりは無く、一日も早い収束を祈ると共に、利用者様の心に寄り添える自分にならねばと思い、二四年目の抱負に代えさせて頂きます。

富士山病院介護医療院の「ホームページ」ご案内

当施設は認知症高齢者の症状を「改善」「進行を遅らせる」「進行の停止」そしてご家族の精神的負担を軽減することを目標とし日々努めております。施設のHPでは認知症に対する各種対応法やケアについて記載してあります。
ぜひ一度ご覧になってみてください。

http : // ninchisyo. jp